

まちづくり交流会



舞台上立つ人々のお話

令和4年
夏号
発行
馬路村農協



農協HP
はこちら

86歳
すみちゃんの
バイリンガル
コーナー

村特有の
バイリンガル用語が
たくさんあります。
あなたは
わかるかな？

Q) べったり

例) まちづくり交流会に参加した村民の一言。
Q: まあ、今日は人がべったり来ちゅうねえ
さて、「べったり」とはどういう意味？

※答えは裏面に



2003年、愛知県足助町（当時）で足助町観光協会の設立10周年の記念式典として、同協会と日頃から交流が続いていた地域づくりに燃える方達が全国から集い、交流会が行われました。

このことをきっかけに「全国まちづくり交流会」として、年ごとに場所を変え開催が続き、2007年第5回交流会の会場には馬路村が選ばれ、小さな山村での開催がなされました。「ゆづの森」で少々不便も体験しながら、「村には価値が生まれる」をテーマに大交流会を行い、それから15年の時を経て再び馬路村で開催されることとなりました。2019年の開催地・飯館村からバトンを引き継ぎながらも、コロナによってなかなか開催ができませんでしたが、2022年6月、ようやく馬路村にて開催する運びとなりました。



2019年飯館村にてバトンを受け取る

昼の部 講演会

馬路村の集会所で「劇団・杉ぼっくり」による馬路村の林業の歴史紹介から始まった講演会。

鮎瀬の解禁となった6月頭、北は北海道から南は鹿児島島の与論島まで、総勢約100名が馬路村に集まり、熱気に包まれる会場の中で、馬路村の村長、農協の元組合長、隣の山奥の畑山地区で宿を営む小松さん、地域づくりの情報誌「かがり火」の代表菅原さんが順々に登壇し、それぞれが特色ある話をされました。

村長と元組合長は、林業の話や馬路村がゆづの村として知られるようになるまでの歩みを振り返り、96%の森林率の村の中の産業の在り方を紹介。畑山の小松さんは限界集落の安芸市畑山地区でブランド鶏「土佐ジロー」を育てながら宿も営む元新聞記者。田舎だから出来る価値観の提供のお話に会場も大きく頷いていました。会場内に知らない人はいない情報誌「かがり火」の代表菅原さんは、長きに渡り発行してきた内容を振り返り、地域の考え方を示しました。

「地域づくり」や「村おこし」という言葉の重みをまじまじと感じることのできる貴重な屋の部でありました。



かがり火代表
菅原 欽一



はたやま音楽社長
小松 圭子

安芸市畑山地区に愛媛県から嫁ぎ、限界集落での産業づくりに奮闘。土佐ジローを通して食の大切さも説く。

ごつくん馬路村の生みの親。半世紀に渡って農協を引っ張り、地域づくりに妥協なく取り組んできた。



元農協組合長
東谷 望史

村政を担って二期目。若くから村役場職員としてずっと「馬路村」を考えてきた。



【主な講演者】

馬路村村長
山崎 出

夜の部 交流会

飯館村からバトンを受け取った3年前から構想し、場所や見せ方、メニュー、はては照明の角度まで。全国から集まる人たちにどのように村を満喫して帰ってもらうか、昼の部とは違った演出を練りに練って、いよいよ夜の部の開幕です。

思い出されるのは2007年馬路村開催の交流会。夜の部の途中で雷雨となり、慌てて建物の中に避難するという、ある意味記憶に残る交流会となりました。今回はコロナと変わる天気に翻弄されながらも、なんとか天気が持ちこたえてくれ、馬路村の川や山の景色を楽しんでもらうことのできる屋外開催とすることができました。

会場ですまず最初に目についたのが、大きな火を立ち上げながら、鯉の薫焼きタタキをつくる馬路温泉の料理長。全国から集まった人たちがこの演出には大喜び。焼きたての鯉の薫焼きタタキの横には、馬路村安田川でとれた天然アユの塩焼き、焼サバ寿司、新鮮なお刺身など、土佐高知ならではのメニューが並びます。農協女性部もゆづ香るちらし寿司を実演し、その良い香りに皆立ち止まっていました。ここでは書ききることができませんが、他にも馬路村が腕によりをかけた料理がずらりと並び、熱い情報交換の場を彩ります。参加者の思いもますます熱気を帯び、この交流会がそれぞれの地域の大きな活力になっていくことでしょう。



まちづくり な交流会

スタッフの
ドタバタ
奮闘劇。

「まずは村の入口に歓迎の横断幕を掲げよう」村の入口の朝日山地区の段々畑に、大きな竹と手書きの横断幕を掲げたのが交流会前日。さまざまな演出を考へ準備しておりましたが、村の中でこのような大規模なイベントをやるのは久しぶり。さらにコロナ禍でどのように対策をするかなど、交流会の開始直前までドタバタが続く。村の入口の横断幕の準備ができたのがようやく前日。現地の段々畑であーでもないこーでもないを繰り返して、なんとか竹に看板の布をくりつけ掲げることができ、さあこれから交流会が始まるぞ、と村の中に雰囲気をもたらしにくれました。この新聞裏面では、交流会の華やかな表舞台の裏の馬路村スタッフの奮闘劇をお届けします。

ちなみに、横断幕を掲げた一時間後に電話が。風にあおられ横断幕が見る影もない姿になっている、と。慌ててやり直し、ドタバタの序章を飾ってくれました。



鮎がおらん。

晩の交流会のメインとなる安田川の天然鮎。6月1日に鮎漁が解禁となるわけですが、交流会の開催は6月3〜4日。わずか3日で300匹以上をおさねなければなりません。事前に鮎のプロたちにお願いをし、何とか鮎の確保を試みますが、鮎のプロたちは解禁前から川の様子を見て「今年は、鮎が少ないぞー」と不安な言葉を口にします。塩焼きなどにするには、ある程度大きさが必要で、全国から集まった人たちを喜ばせる演出に鮎は欠かせません。不安で迎えた鮎漁解禁当日、まず天気はクリア。前日に大雨も降らず、川のにこりもありません。鮎のプロたちは明け方から竿を出し、後はプロの腕と鮎様の気分次第。いくらか会議を重ねようとも、こればかりはどうにもなりません。しばらく経ち、途中経過を聞くとうと近づいても、こちらを見ることもなく無言で川を見続ける横顔を見ると、釣果はイマイチの様子。「おらん?」「おらん」のやり取りが川に響き、ますます不安が大きくなり幕が閉じた初日。鮎のプロたちも引き受けたからには後には引けません。おらん、ながらも解禁からの3日間、明け方から晩まで川で釣り続け、なんとか目標の300匹以上をおさえて、プロ根性をまじまじと見せてくれました。ひやひやとした3日間でしたが、プロの腕と安田川の神様が救ってくれ、ほつと胸をなでおろすスタッフ一同でした。



川原の土木作業隊。



晩の交流会の会場は、効率よく準備するため、車で乗り入れられる駐車場にしようかと、会議で決まりかけていた時に、おんちゃんやポツリと言いました。「川原でやった方が雰囲気が出るけん」とこの言葉に皆も賛同し、効率よりも雰囲気優先しようとした。川原は車が入ることができないことはもちろん、机を並べることができない程、大きな岩がたくさんあり、とても交流会ができるような状態ではありません。雨の合間を見てはスタッフが集まり、人力で岩をのけながら会場をつくり、普段こうした力仕事をしていないデスクワークのスタッフも総出となり汗をかきながら大岩と格闘していきます。ようやく会場が形になってきた頃「もつとこうしよう」とさらなるアイデアも出てきたり、汗をかいた分、交流会への思い入れが益々大きくなった日でした。



照明は料理を照らすもんじやない。

晩の交流会会場を照らすための照明。

スタッフは夕方から照明を取り付け、とにかく料理や参加者の顔などが分かるように照明の角度や場所を選んでいきます。すべての照明が取り付け終わった時、交流会の演出を取り仕切る東谷のおんちゃんがやってきて「照明がなっていない」と若いスタッフに一言。「照明は料理を照らすもんじやないがよ、晩の会場の雰囲気をつくる一番のものが照明」と照明論が始まります。晩の交流会の開演時間が間近にせまり、あせるスタッフ。東谷のおんちゃんの照明論をしつかりと聞き、料理や会場テーブルにあてていた照明の角度を木の葉っぱなどに向け、会場全体をぼんやり照らすように演出します。すべての照明をやり直して見渡すと、なるほど会場全体が柔らかなり、おんちゃんのいうように雰囲気が出るようになりました。開演ギリギリまでの攻防が、満足につながったことと思います。



帰るまでが交流会です。



交流会のすべての日程を終え、参加者たちはくねくね道を帰路につくわけですが、馬路村のスタッフで「お見送りをしよう」とは決めており、しかも村の入口の段々畑から手を振って見送ろうとしておりました。そしてお見送りの朝、畑に集まったのはわずか数名。前日の交流会の疲れからか寝過してしまいう人が続出し、慌てて電話をかけバスの出発前に人を集めます。なんとかお見送りの人は集まり、最後の最後、精一杯に手を振り、参加者たちもバスから手を振ってくれ、温かい気持ちでお見送りも無事終わりました。スタッフもお疲れ様と解散し帰路についた時、一本の電話。「もう一台が温泉を出たよ」なんと後便のバスがあったのです。今から皆を呼び戻しても間に合わない、最後の片付けに残っていたスタッフ一人が段々畑から懸命に旗と手を振り見送り、最後の最後までドタバタがやまないスタッフ奮闘劇でした。

すみちゃんの
バイリンガル
コーナー



「べつたり」
＝
「たくさん」
使用例…まあ、今日は人がべつたり来ちゅうねえ
たまげたちや

馬路温泉



馬路温泉 HP

つるつるのお湯でゆったり。
食事、宿泊もできます。
電話番号
0887-44-2026
予約専用フリーダイヤル
0120-144-2026



森を元気にする会社
エコアス馬路村



<http://www.ecoasu.co.jp/>

編集後記

2007年に馬路村で開催されたまちづくり交流会には私は参加できておらず、初めてこのような大規模な交流会に参加できました。準備に汗かくのはもちろん、全国から集まった熱心な人たちのエネルギーに圧倒され、クタクタになった2日間でしたが、なんとも心地よい疲労感であったことは間違いありません。普段村の中で生活していると、忘れかけてくるこの村の価値も改めて感じることで、ものすごく充実した2日間でした。ちなみに川原の岩運びから始まり、晩の交流会では川原に重たい荷物を運んだり、慣れない肉体労働によって発生した筋肉痛がしばらく残り、まるで交流会の余韻のようでありました。